

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520712

研究課題名(和文) コミュニカティブ・ランゲージ・ティーチングの日本への文脈化の研究

研究課題名(英文) A Research of Contextualization of Communicative Language Teaching into Japan

研究代表者

清田 洋一 (Kiyota, Yoichi)

明星大学・教育学部・准教授

研究者番号：60513843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は自律的な学習の継続を支援するツールとしての言語学習ポートフォリオの開発とその指導方法の開発に取り組んだ。本ポートフォリオの一番の目的は、学習者の英語学習への意識を変え、その結果、意欲を向上させることにある。具体的には、自分の英語学習へのニーズとそれに沿った具体的な言語学習という観点から、自分の学習目標を確認し、取り組んだ成果を自己評価するという一連の流れによって、自分に適した英語学習サイクルの確立を目指している。本ポートフォリオを活用した高等学校での1年間の実践を通じて、英語学習に対学習意欲の向上と、教員の指導方法への意識の深まりが確認され、その有効性が実証された。

研究成果の概要(英文)：This research focused on development of a language learning portfolio as a tool to enhance autonomous English learning. The primary purpose of this portfolio is to enhance learners' motivation through using this tool. From the viewpoint of learners' needs for language learning, they confirm their learning goals, and evaluate their own attainment with the portfolio, which relates to establishing their English autonomous learning cycle. Through the one year experimental project using this portfolio at a high school, it has been confirmed that students' motivation has been improved significantly. Moreover, it has been also confirmed that teachers' awareness toward teaching skills has deepened.

研究分野：英語教育

キーワード：言語学習ポートフォリオ 自律学習 CAN-DOリスト 教師教育 授業力 学習動機 CLT

1. 研究開始当初の背景

日本の英語教育は明らかに停滞している。「英語が使える日本人」の育成のための行動計画にもかかわらず、英語が使える日本人が期待通りに増えてるとは言えない。それどころか、中学や高校で基礎的な知識や技能さえ習得できなかったリメディアル教育対象の大学生の増加がやまない。本研究はこの2つの事態を改善するためには、CLTの日本の教育現場への適切な文脈化が必要であると考えた。

CLTが日本の教育現場で進まない理由は、以下の3点であると推察する。

1) 英語の学習が、実生活で使用する手段としての言語学習ではなく、定期試験や受験のための一教科という視点から意識されており、コミュニケーション・ツールとしての言語学習であると意識されていない。つまり、学習者個人の将来のために、自分に適した学習を追求するという、自律的な学習意識が欠如している。

2) オーラル・コミュニケーション(OC)の教材はあったが、日本の学校現場に適した指導法は明確でなかった：日本の教員は、文法力や読解力を伸ばしていく指導法には精通しているが、コミュニケーション能力をどのように伸ばしていくかについて精通していなかった。

3) コミュニカティブな能力を伸ばすための評価法が確立していなかった：日本の教育現場では、減点主義の切り捨てる評価法が一般的である。しかし、CLTでは、学習者の「できないところ」ではなく「できるところ」を伸ばす評価をする必要がある。しかし、その伸ばす評価のモデルは研究はされたが、普及していない。そのような背景を基に、本研究では、学校教育における英語コミュニケーション能力の向上のための教育、つまりCLTを促進するための方法の研究を行った。

2. 研究の目的

本研究では、学校教育における英語コミュニケーション能力の向上のための教育、つまりCLTを促進するための方法の開発を目的とした。具体的方策としては、自律的学習者の養成を目的とした言語ポートフォリオの開発と教育現場における指導方法の研究を目的とした。

3. 研究の方法

以下の方法で研究に取り組んだ。

1. 「言語は使うことを通して習得するものである」という考えに立った、日本の小学校から大学までの現場の教員が共通理解できる行動志向の言語ポートフォリオの開発。
2. 上記の言語ポートフォリオを活用したCLT

の指導方法の開発。第1段階として、省察的な振り返りが可能な学齢を考慮して、現行の高等学校の検定教科書を基にした指導方法を開発。

3. 上記の目的を補完し、将来的には小中高大と連携して継続的に評価する「学習者を伸ばすための評価ツール」としての言語ポートフォリオの効果の検証。
4. 言語学習ポートフォリオプロジェクトを通じた教師側の授業力に対する意識の変容の検証。

4. 研究成果

本研究の取り組みの結果、学習者(生徒)と指導者(教師)に関して2点の成果が確認された。まず、学習者に関する成果としては、言語学習ポートフォリオのCAN-DOリストの目標設定に対する自己評価活動や、英語学習と自分のニーズを定期的に考える機会を持つことで学習者の英語学習に対する意識が深まり、意欲の向上が見られた。また、指導者側の成果として、CAN-DOリストの目標設定に沿った言語活動中心の授業を実施するために、これまで取り組んできた授業の検証と改善、さらにそれに沿った評価方法の開発に取り組みなどの変化が見られた。言語学習ポートフォリオを活用することで、日本の学校現場において、言語の技能を学ぶCLTを促進できることが確認された。具体的には以下の通りである。

本ポートフォリオ、*My Learning Mate* (以下、*MLM*)は、CAN-DOリストによって各単元や年間の達成度を自己評価したり、コメント欄に学んだことや自分の意見を書くことにより、自分の学習の振り返りができるよう構成されている。CAN-DOリストは言語の働きに関してどれだけ習得できたかを自己評価する内容になっている。そのため、普通の授業においても、実践的なコミュニケーション活動に取り組む必要がある。実際の指導手順としては、各レッスンの最初の授業で目標を確認し、レッスン終了後に記入するようにしている。しかし、自己評価は思ったよりも難しく、それぞれの達成目標に対して授業中にどのような活動をしたのかが明確でなければ生徒たちは評価をすることができなかった。そこで、ペアやグループでの活動を積極的に取り入れることなどの取り組みを行った。例えば、「教科書の手紙の内容を正確に読み取り、読んで相手に伝えることができる」を自分で評価するには、実際にペアなどで音読し相手に伝わったかどうか確かめる必要がある。そこで、ペアでの音読の際には「評価シート」を使って互いの音読を評価しアドバイスすることにした。例えば、「自分の好きな絵や写真について簡単なスピーチを行うことができる」については、発表態度やクラスメートにわかりやすく伝えるにはどのようにしたら良いかを工夫し、実際にグループで好きな絵の紹介をした。これも他のグループの発

表を評価しコメントやアドバイスをすると
いう課題を与え、それぞれのグループに評価
結果を周知した。MLMの導入をきっかけに
して、他人からの評価によって自信を持つこ
とができたり、アドバイスを受けることで課
題を発見できるようになったのは、協働学
習としての大きな意義であると考えられ
る。

生徒の変化としては、それまでの授業で
行ってきた活動でのクラスメートからの評
価や自分でMLMに書き込んできた自己評
価を参考に自らの課題を見つけて取り組
む様子が伺えるようになった。「次のパ
フォーマンス・テストではもっと滑らかに
自分の意見を言いたい」などの欲求が、
日々の授業をより活気のあるものにし
ていくというサイクルができつつあるこ
とが確認できた。

また、MLMにある達成目標は生徒にと
っての目標であると同時に教員の指標と
なり、より良い授業を行うために担当
者間で意見を交換しながら授業展開の
方法を改善するために大きく役立った。
MLM導入以前の打ち合わせは定期テ
ストの範囲や出題の方針などを統一す
ることが中心だったが、今は各レッス
ンの目標を共有するために会話が増え
、各学期、各学年の目標に到達するた
めに何が必要なのかを話し合える環
境ができあがりつつある。

また、本プロジェクトを通じた生徒の英
語学習に取り組む姿勢の変容について
調べるため、アンケート調査を行った。
年度の当初と終わりの2回実施し、学
習に対する姿勢と積極性において改善
が見られた。

MLMの導入にあたり、学習者の英語
学習への意識の変化を調べるために、
導入時の4月とほぼ1年後の3月に
アンケート調査を行った。調査項目は、
5分野15項目で、5段階の尺度で
自己評価を行った。

- ・ 英語学習への意志について（項目例：
将来、大学や社会に出てから英語学
習の機会があれば、受講したい）
- ・ 将来の理想的な外国語使用者のイメ
ージについて（項目例：将来、自分
が外国の人と英語で話している具
体的な状況を思い描くことができる）
- ・ 望ましい外国語学習者としての自分
（項目例：友人たちが英語を学ぶ
ことは重要であると考えているの
で、自分も英語を学ぶ必要がある
と思う）
- ・ 英語学習への態度（項目例：英語
学習が好きである）
- ・ 英語でのインタラクションの態度
（項目例：英語で自分の思ってい
ることをなるべく発言しようと思
う）

ほとんどの項目において値が上昇して
いたが、特に4月の導入時と比較し
て、値が高まったのは次の項目であ
る。

- ・ 将来、大学や社会に出てから英語
学習の機会があれば、受講したい
（英語学習への意志）
- ・ 現在、英語学習に一生懸命取り組
んで

いる（英語学習への意志）

- ・ 英語学習が好きである（英語学
習への態度）
- ・ 英語を学ぶのは楽しい（英語学
習への態度）
- ・ 英語で自分の思っていることを
なるべく発言しようと思う（英
語でのインタラクションの態度）
- ・ つたなくても英語で自分の考
えを伝えようと思う（英語で
のインタラクションの態度）

また、プロジェクトに参加した教師
同士の連携が深まり、互いに良く
連携して、指導に取り組むなど、
いわゆる「同僚問題」の解決策
としても有効であることが確認
された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び
連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

清田 洋一「授業で英語を多く
使うために：行動志向のア
プローチのすすめ〔3〕表
現活動で英語を使う」
査読無 英語教育（平成24年
6月号）（大修館書店）pp.48-50

清田 洋一「授業で英語を多く
使うために：行動志向のア
プローチのすすめ〔10〕教
科書に基づく1年間の指導
の達成目標とCAN-DOリス
ト」
査読無 英語教育（平成25
年1月号）（大修館書店）
pp.48-50

清田 洋一「英語科教科法の
授業におけるJ-POSTLの
統合的な活用法」
査読有 “Language Teacher
Education Vol.2, No.1,
JACETSIG-ELE Journal”
The Special Interest Group
of the Japan Association of
College English Teachers on
English Language Education
（JACET教育問題研究会）

〔学会発表〕（計5件）

清田 洋一
学会名：語学教育エキスポ
2013
発表日時：2013年3月17
日
会場：早稲田大学（東京
都新宿区戸塚町）
発表形式：シンポジウム
題目：「生徒が英語力を
向上させる時の気づきに
資するCAN-DOリストの
開発、利用について」

清田 洋一
学会名：全国英語教育学
会2013
発表日時：2013年8月10
日
会場：北星学園大学（北
海道札幌市厚別区大谷
地西2丁目3-1）
発表形式：個人発表

題目：「英語教育における CAN-DO リストの活用」

清田 洋一

学会名：語学教育エキスポ 2014
発表日時：2014 年 3 月 9 日
会場：早稲田大学（東京都新宿区戸塚町）
発表形式：個人発表
題目：「外国語学習における My Time Line」
（自律的に継続する外国語学習への支援）

清田 洋一

学会名：全国英語教育学会 2014
発表日時：2014 年 8 月 10 日
会場：徳島大学（徳島県徳島市新蔵町）
発表形式：個人発表
題目「英語教育における言語学習ポートフォリオの活用」

清田 洋一

学会名：語学教育エキスポ 2015
発表日時：2015 年 3 月 15 日
会場：早稲田大学（東京都新宿区戸塚町）
発表形式：個人発表
題目：「英語教育における言語学習ポートフォリオの活用」

〔図書〕(計 2 件)

著者：神保尚武，久村研，酒井志延，高木
亜希子，清田洋一，2014 年 3 月 9 日発行，
書名：- 成長のための省察ツール - 『言語教
師のポートフォリオ』Japanese Portfolio
for Student Teachers of Languages
(J-POSTL) - A reflection tool for
professional development - 【英語教師教育
全編】
総ページ数 86 ページ，JACET 教育問題研究会
発行

著者：神保尚武，久村研，酒井志延，高木
亜希子，清田洋一，2014 年 3 月 9 日発行，
書名：- 成長のための省察ツール - 『言語教
師のポートフォリオ』Japanese Portfolio
for Student Teachers of Languages
(J-POSTL) - A reflection tool for
professional development - 【現職英語教師
全編】
総ページ数 64 ページ，JACET 教育問題研究会
発行

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清田 洋一 (KIYOTA, Yoichi)
明星大学・教育学部・全学共通教育委員会・
外語語部会英語

研究者番号：60513843

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

浅岡千利世 (ASAOKA, Chitose)
獨協大学・外国語学部・准教授
研究者番号：30296793

栗原文子 (KURIHARA, Fumiko)
中央大学・商学部・教授
研究者番号：60318920
（平成 25 年度より連携研究者）

遠藤雪枝 (ENDO, Yukie)
清泉大学・文学部・専任講師
研究者番号：70407758